

内藤書簡研究の新しい展開可能性について

— 満洲建国後の石原莞爾・羅振玉との協働を例に —

陶 德 民 藤 田 高 夫

The New Possibility of Furthering Studies on Naitō Konan-related Correspondences:

The Cases of His Contacts with Ishihara Kanji
and Luo Zhenyu after the Founding of the *Manchuguo*

TAO Demin FUJITA Takao

With the completion of photographing the correspondences addressed to Naitō Konan (1866–1934) preserved in the Naitō Collection at Kansai University Library, it became much easier for researchers to link and make sense of those correspondences included in the 14th volume of *Naitō Konan Zenshū*. The present paper attempts to show this new possibility by analyzing the two cases of Naitō's contacts with Ishihara Kanji (1889–1949) and Luo Zhenyu (1866–1940) respectively in the immediate aftermath of the founding of the *Manchuguo* in March 1932. Ishihara's military postcard dated August 13, 1932 sent from the Military Headquarter in Hōten (Shenyang) to Naitō in Kyoto expressed his apology for not being able to find the site of an historical battle field in Manchuria, which was a request of Naitō when he was first visited by Ishihara shortly after the latter's appointment to the Kwantung Army as its Strategy Staff in late 1928. The paper also verified the role of Inaba Iwakichi (1776–1940) as a constant mediator since then between Naitō and Ishihara because of his special status as Naitō's follower in the field of Manchurian studies on the one hand, and Ishihara's favorable teacher when he was studying at the Military Staff College in the mid-1910s on the other. Luo Zhenyu's letter to Naitō dated August 22, 1932 suggested using the confiscated assets of Zhang Zuolin and Zhang Xueliang to make

photographic reproduction of the authentic records of the successive emperors of the Qing Dynasty and hoped that Naitō could help get approval from the War Minister. And from several succeeding contacts between Naitō and the *Genrō* Saionji Kinmochi as well as the Prime Minister Saitō Makoto, it was apparent that Naitō had tried very hard to help Luo in this regard not only because of their long-lasting friendship and shared interest, but also because of their respective need to struggle for capturing the leadership, which was Luo from the Prime Minister Zheng Xiaoxu in the *Manchuguo* concerning the traditional cultural preserving projects, whereas Naitō from Hattori Unokichi in Japan concerning the founding of the *Nichi-Man Bunka kyōkai*.

内藤湖南（1866-1934）の発信した「書簡」が1976年刊行の『内藤湖南全集』第十四巻に多数収録されている。そのなかで年月順に編纂されている和文書簡は上下二段組で323ページにわたり、17歳にあたる1882年から最晩年の1934年までの748通を含んでいる。一方、約40通の漢文書簡は同十四巻所収の『湖南文存』「巻十六」と「補遺」に収められている。しかし、これらの書簡中の重要部分がどのようなコンテキストの中で書かれ、どのような意味合いをもっているのだろうか。一般的に言えば、ある書簡の受信者関連情報（その返信や内藤との関係、第三者ないし同時代の種々の背景など）がより詳しく分かれば、その書簡の内容と性格について見当がつきやすくなるはずである。近年、関西大学図書館内藤文庫所蔵の「内藤宛書簡」に対する写真撮影とデジタルファイル化の作業完成につれて、発信者と受信者の往復書簡の特定やリンク、交信内容の確認や検討がずいぶんしやすくなった。

本研究ノートは、内藤と満洲建国後の石原莞爾（1889-1949）・羅振玉（1866-1940）との協働を通じてこのような研究手法を試みるものである。周知のとおり、山室信一氏の名著『キメラ——満洲国の肖像』においては、石原莞爾が世界最終戦としての日米戦争を見越して「満蒙領有論」を首唱した同時代の軍事戦略家の筆頭、羅振玉が清朝復辟派の主要人物として描かれている。一方、「中国学の泰斗」である内藤の東西文明対決論や満洲「建国の理想」とされた「王道」説に対する彼の疑念も紹介されている。また、最近岩波現代文庫に改版収録された緒方貞子『満州事変——政策の形成過程』（2011年；1966年原書房初版）で石原莞爾の持論や羅振玉の役割も重要な位置づけを与えられている。ここで具体的に考察しようとするのは、すなわち「満鮮古戦場」探しをめぐる内藤に対する石原の協力と「清実録」影印費調達をめぐる羅振玉提案

に対する内藤の協力という二つの事例であり、あわせて最近の研究動向に触れたいと思う。

(一) 「満鮮古戦場」探しをめぐる内藤に対する石原の協力

内藤文庫に通常の封書と葉書と違う形態をしている珍しい「軍事郵便」1枚があり、「奉天軍司令部 石原莞爾」が1932年8月13日付けで「京都府相楽郡瓶原村 内藤虎次郎先生」に宛てられたものである〔写真1と写真2〕。

冒頭で「先達」に紹介された「羽田博士」との面会機会を失い、「拝顔」できなかつたことについて残念の心境を明らかにしている。この「羽田博士」はいうまでもなく、内藤の弟子で京都帝国大学東洋史教授の羽田亨（1882-1955）である。同年5月、羽田、同大教育学教授小西重直（1875-1848 翌年京大総長になったが、「滝川事件」で辞職した）および定年直後の同大

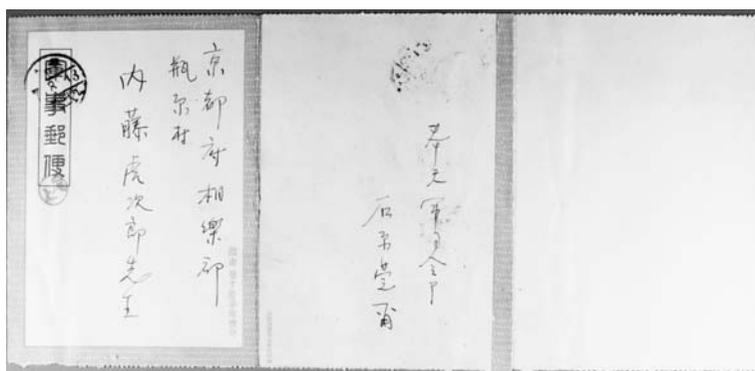


写真1 内藤あて石原書簡 表

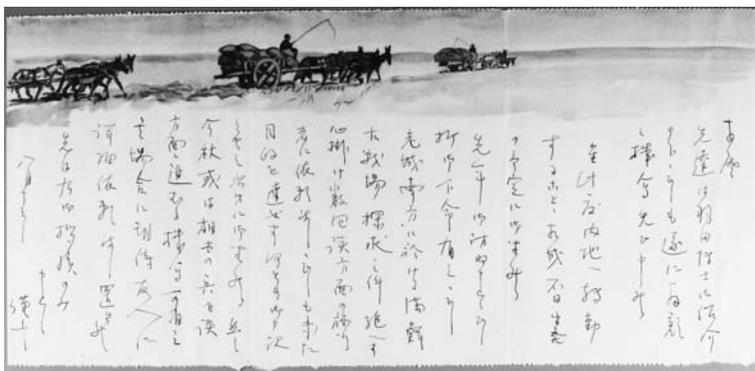


写真2 内藤あて石原書簡 裏

東洋史教授矢野仁一（1872-1970）ら3人は関東軍臨時顧問として渡満し、それぞれ文化工作、教育問題と満州国一般について進言した。整理された3通の意見書は、王道国家論、少定員制学校論および文化院設置に関する建議であった¹⁾。

つづいて、石原は「内地転勤」、近く出発予定のことを告げたが、書簡の主要目的は、「先年」の内藤訪問時に依頼された「老城南方に於ける満鮮古戦場探求之件」を果たせなかったことに対するお詫びの気持ちを伝えたいことにあった。

「先年」の「内藤博士訪問」は内藤の高弟稲葉岩吉（1776-1940 号は君山）の紹介で実現したものであり、角田順編『石原莞爾資料』によれば、石原が1929年2月12日の訪問の前に1月15日に次のような二つの質問事項を用意した。

- 一、我武力ニヨリ外敵ノ来襲ヲ支へ、且、支那の治安ヲ維持シ得ルモノトセバ、支那ヲ占領シテ長年月ノ持久戦ハ可能ナリヤ。
- 二、支那ハ如何ナル方針ニ進ムヘキモノナリヤ、我統治ノ根本方針、切開スヘキ支那ノ病源。

しかし、「御病氣中特ニ長時間話アリ」にもかかわらず、「但シ主目的ハ十分達スル能ハザリキ」という結果になったようである²⁾。

では、会談中に頼まれて探すべき「老城南方に於ける満鮮古戦場」はどこにあったろうか。「老城」とは、清朝の発祥地として知られるホトアラ（赫図阿拉）のことで、清の太祖ヌルハチがここに築城、のちに「興京」と改名された（現在の遼寧省新賓県老城村周辺）。内藤の編纂した『満洲写真帳』に「興京老城」とその周囲の風貌に関する9枚の写真を収録しているが、「満鮮古戦場」に対する特定を行っていなかった³⁾。推測として、「老城南方」にあったはずの古戦場の場所確定は一つの懸案事項としてずっと内藤の脳裏に残っているため、20年後の1929年に満洲で大活躍できそうな石原と面会の際にこの一件を託したのであろう。そこには、内藤の歴史家としてのロマンもあり、また正確の歴史地理知識は統治者や軍事家にとって不可欠な情報であるという記者時代に磨かれた鋭敏な政治感覚もあっただろう⁴⁾。

1) 岡村敬二『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』（私家版、2006年）、25頁。

2) 青江舜二郎『石原莞爾』（中公文庫、1992年）、171-172頁より転載。

3) 『満洲写真帳』、『内藤湖南全集』第六卷所収、642-646頁。

4) 例えば、1908年大阪朝日新聞に掲載された内藤の『間島吉林旅行談』（11月3日から12月6日まで12回連載）という同年夏の旅行に対する回顧文に次の一節がある。「この次は歩いた土地の歴史上の事に關係して

実は、石原は関東軍参謀（作戦主任）として旅順に着任したのは、この訪問の約4ヶ月前の1928年10月20日であった。その後、世界最終戦の前哨戦としての「東亜大持久戦」を準備するために、1931年9月の満洲事変や1932年3月の満洲建国などを関東軍高級参謀で支那通の板垣征四郎とともに画策したのであった。内藤がこれらの動きをずっと見守っていたことは、当時朝鮮総督府直轄の朝鮮史編修会の幹事をしている稲葉岩吉にあてた次のような二つの書簡から窺うことができる。

① 1932年1月30日 瓶原村より朝鮮京城府和泉町官舎・稲葉岩吉宛⁵⁾

（前略）

清朝開國傳説の尊稿は新材料にて考證せられ非常に有益に存候。昨年北京より謝國楨來訪、此方面の研究は全く我々の所論を基礎とするやうになり居候間、尊稿も見せたきものと存候。

兼而御提出の論文は本月初旬矢野君へ申入候處、退職迄には必ず片付けると申居候。同君は過日來滿洲問題に大多忙に御座候。「支那學」も復興致候間、何とぞ御寄稿願上度候。

（中略）

一月卅日

虎次郎

君山編修 侍史

再白 石原中佐大活動のよしにて此方まで嘖々傳稱せられ居候。小生は宣統の取扱方につき心配致居候、一應新首相まで意見申述置候。宣統の才徳再興に堪ふるや否や、周囲の諸臣が却て事を償らざるやと懸念に不堪也。羅氏など金がなく大困のやうす也。

自分の観た所の一、二を言つて見る。自分が此の際研究して見たいと思つたのは、昔高麗の時代に於て尹權といふ大將が女眞人と戦つた事がある。これは七年間も繼續した大戦争であつて、女眞の方でも、金國の勃興の際に當つて居る。その争つた土地が、何の邊であるかといふことは、支那の歴史家は勿論注意しないが、朝鮮の歴史家も大層粗雑な調べをして居る。夫れを明かにしたいと思つたのであるが、夫れに就ては其の古跡と思はれる處の確な土地をも發見し、又大體其の争地となつた處に就ても、新に得た智識があるけれども、是れは一通り歴史の智識のある人でも、あまり注意しないやうな事實であつて、今茲に其の話をした處が、多くの人の興味を惹くことが無いから夫は省く」と。要するに、内藤から見れば、「昔でも今でも大体の地形には變化がないからして、矢張種族の繁榮する所は大抵決まつて居る。是等は實際上の探検をすると歴史に關して非常に有益材料を得る所以である」。同注2、第六卷、429頁、432頁。

5) 和文書簡678、『内藤湖南全集』第十四卷、628-629頁。句読点と下線は筆者による。以下同様。

この中の謝國楨（1901-1982）は梁啓超の弟子で『清朝開国史料考』・『晚明史籍考』の著者であった。1930年代初期にまだ一人前の研究者になったばかりで、その所論は大きく日本側の研究成果に依存していると内藤は自負していた。

そして、当時の矢野仁一は定年直前で、内藤の依頼により稲葉の博士学位請求論文を審査していた。

書簡作成日の1月30日は、「宣統」帝すなわち清朝のラスト・エンペラーである溥儀を起用する満洲建国を1ヶ月後に控えているという大事な時点であり、その溥儀を皇帝にしようとした帝制採用派（羅振玉のような清朝復辟派を含む）と共和制下の元首にしようとした満洲の地方実力派と激しく対立し、関東軍側の調停でようやく2月24日に、まずは「執政」とし、善政を行うこと数年にして、人民が執政の徳を称えて皇帝に推戴すれば、帝制に移行するという妥協案に決着した⁶⁾。「宣統の取扱方」に関する論争に懸念している内藤は、満洲事変の約3ヶ月後の1931年12月に就任した「新首相」で政見や文人趣味を共有していた親友の犬養毅に「意見申述」したいことを、愛弟子の稲葉に打ち明けた。

② 1932年6月30日 瓶原村より朝鮮京城府和泉町官舎三號・稲葉岩吉宛⁷⁾

拜啓 學位記いよいよ御落手のよし、小生も是にて安心仕候次第に御座候、荊妻も大満悦にて、皆々様へよろしく申上候やう申出候。

過日御送り下され候黄草嶺碑闕文補入拓本誠に難有、是にて金秋史が見たるもの殆ど全部を見得候譯にて、特に秋史が讀誤り候ものも正し得ること可喜の至に御座候。

關東軍御訪問のよし、何卒本庄將軍・石原參謀などに、満洲國の治績は王道とか大同とか申す空言に拘束されず、顧實行如何候やう御勸告被下度候。京都よりかの地に參候諸教授の報告は、羽田氏の外未だ詳細承り不申候得共、學者の議論動もすれば空言に流るゝに至らずやと憂念致居候。尚御視察の後委細承り申度候。早々不一

六月卅日

虎次郎頓首

君山博士 侍史

6) 山室信一『キメラ——満洲国の肖像』（中公新書1993年初版、2004年増補版）、151頁。

7) 和文書簡694、『内藤湖南全集』第十四卷、634-635頁。

ここでまずに注目したいのは、稲葉に対する内藤の呼称が「君山編修」から「君山博士」に変化したことである。書簡の冒頭にもあるように、矢野教授の論文審査結果が教授会で承認され、稲葉から京大博士号取得との報告を受けた内藤と郁子夫人は大歓喜を覚えたようである。

書簡中に言及された金秋史（1786-1856 名は正喜）は同時代の中国を訪ね、阮元・翁方綱などの教示を受け、また高く評価された朝鮮書道史の泰斗であり、経学者でもあった⁸⁾。内藤は、稲葉が贈った「黄草嶺碑」（新羅の真興王が568年に建立）の闕文補入拓本で金氏関連資料を全部目配ることができ、また金氏の誤読も判明できるようになったため、大喜びを感じた。歴史人物の評価にあたっての内藤の学風の謹厳さがよって分かるが、内藤の金氏注目の主な原因はおそらく阮元の「抑南揚北論」（「北碑」派を持ち上げることで「南帖」派を貶めようとした論調）に追随した金氏の朝鮮における影響にあったらう⁹⁾。

最後の一節は、3ヶ月前にできた満洲国の政治理念に関する内藤の意見であるが、要するに「王道」や「大同」といった美辞麗句にこだわらず、実際の施策効果を最重要視すべきだというものである。この意見は「満洲国今後の方針に就て」と題する文章として翌7月に雑誌『大亜細亜』に発表されることになるが¹⁰⁾、ここでは、それを近いうちに満洲国訪問を予定している稲葉に、本庄繁関東軍司令官と石原参謀に伝えるように頼んだ。

事実、稲葉は内藤との関係も石原との関係も尋常ではなかった。

内藤より10歳年下の稲葉は、内藤と似たような経歴を一部持ち合わせている。1899年内藤の清国初遊学は衆議院議員榊田清兵衛の資金援助を得たのに対し、1900年稲葉の北京留学は貴族院議員野崎武吉郎の資金援助を受けた。日露戦争中、内藤は満洲軍占領地行政調査を行ったが、稲葉は第一師団長阪井重季男の司令部で通訳をしていた。1906年、稲葉は内藤の朝鮮・満洲調査旅行に同行した。1907年以降、内藤は京大で東洋史、とくに清朝史を教えはじめたが、翌年から稲葉は満鉄の「満鮮歴史地理調査室」の一員になった。したがって、両者は意気投合し、互いの文通をずっと続けていた。

稲葉は1914年『清朝全史』を刊行したあと、陸軍大学で歴史教官に就任した。1915年同大に入学した石原はその教え子になり、教官のなかでも「特にこの人に親近した」と同期生たちが

8) 呉世昌編『朝鮮書画人物事典』（国書刊行会、1993年）。

9) 内藤の王羲之崇拜と南帖派尊重の立場およびその阮元批判については、陶徳民「大正二年における内藤湖南と藤澤南岳の王右軍論の含意を考える」（同『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承——関西大学内藤文庫所蔵品集を中心に』所収、関西大学東西学術研究所資料叢刊33、関西大学出版部、2013年）を参照。

10) 山室前掲書、同注6、136頁。

語っている¹¹⁾。その背景として、1907年以降の陸軍士官学校で勉学の際に多くの中国人留学生に接したことがあり、中国史について特別の関心があったことが挙げられよう。また陸大卒業後も、漢口派遣隊の一員として現地に1年以上滞在した。1921年、石原は母校に戻り、兵学教官になったが、翌年ドイツ留学に赴いた。一方、稲葉も1922年内藤の推薦で朝鮮総督府修史官となったため、陸大から離れた。もし陸大で1年重なった勤務時期が確認できれば、両者の間に師弟関係のほかに、いま一つ先輩・後輩としての同僚関係も有したことになる。

三者間にこのような信頼関係ができていたため、上記のような密な交信歴をもったことは決して不思議ではない。石原は先の「軍事郵便」で、内藤の依頼を「絶へず心掛け、数回該方面の旅行者に依頼致し乍も、未だ目的を達せず、何とも御申訳無之次第に御座候」と謝罪し、「然し今秋或は相当の兵を該方面に進むる機会可有之、其場合に期待、友人に詳細依頼致し置き候」とも約束したのであった。しかし、この約束を果たす可能性が乏しかった。なぜならば、この郵便物を出した1932年8月、本庄・石原をはじめとする満洲建国の立役者たちの関東軍転出という大規模の人事異動が政軍中枢部による満洲統治方針の大転換を意味し、石原の影響力の残存と行使はもはや望めなくなったからである¹²⁾。『東亜連盟期の石原莞爾』（同成社、2007年）の編者野村乙二郎氏が、石原は満洲国を「東亜連盟の基地として王道による理想国家建設を夢見たのである。しかし、8月、石原が満州を離れると、その後、満洲国経営に参加してくる日本人にはこの地を対米持久戦のための東アジア革命の基地という理念は乏しく、満洲国は単なる植民地となった」と論じている¹³⁾。

ちなみに、石原の内地転任の際の役職は「軍事参議官」・「兵器本廠付」であり、陸大「同期生のなかで最も早く大佐に進級した」そうであるが、不本意の栄転とも言えよう¹⁴⁾。なお、翌1933年8月に石原が仙台駐屯の歩兵第四聯隊長赴任後の「転任挨拶状」（印字葉書の形。8日付け、15日消印）も、内藤文庫に残っている。

（二）「清実録」影印費調達をめぐる羅振玉提案に対する内藤の協力

近年、『清実録』と日満文化協会に関する重要な研究成果が現れている。たとえば、謝貴安氏

11) 青江前掲書、同注2、171頁。陶徳民執筆項目「内藤湖南」・「稲葉岩吉」、『近代日中関係史人名辞典』（東京堂出版、2010）。

12) 山室前掲書、同注6、203-208頁。

13) 野村乙二郎執筆項目「石原莞爾」、前掲『近代日中関係史人名辞典』。

14) 青江前掲書、同注2、295頁。

が己の『清実録研究』（2013年）という70万字（12章構成、705ページ）新著はこれまで『清実録』に関するもっとも「全面・系統・実証」的研究と自負しているようである。しかし、第六章「『清実録』の版本与収蔵」における「偽満『大清歴朝実録』影印本」に関する一節で、杉村勇造、羅継祖、呉相湘、馮爾康、何英芳、孫月嫻および王清政などの証言や先行研究を参考しながらも、「日本政府が巨資を惜しまずに之を印刷に付した」のはその満洲政策の遂行に有利と判断したからと、誤って影印費の出自を日本政府としている¹⁵⁾。その原因の一つは、岡村敬二氏の注目すべき近著、私家版の『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』（2006年）に接する機会がなかったことにあると考えられよう。

岡村氏は、河村一夫、阿部洋などの先行研究に鑑み、外務省文化事業部管轄の日満文化協会と対満文化事業における「政治的色彩」を一旦相対化したうえで、協会草創期の役員構成や協会の性格付け、文化事業をめぐる対立など創設期の経緯を詳細に論じていきたい」という実証的アプローチで関連資料を博搜し、立派な研究成果である同著書を自費出版した。ほかに『残された蔵書——満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』（阿吽社、1994年）、『満州国』資料集積機関概観』（不二出版、2004年）および『満州出版史』（吉川弘文館、2012年）なども出している。

これらの著書から多く学んだ筆者は、ここで内藤関連書簡にもとづいて満州国版「清実録」すなわち『大清歴朝実録』の影印費調達に関する一つの重要な秘話を補充提供したいと思う。『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』の付録「日満文化協会・満日文化協会刊行物一覧」における『大清歴朝実録』解題が次のようになっている。

大清歴朝実録 新京 大満洲帝国國務院 [1937]

注記：「大日本東京大蔵出版株式会社承印」と帙の奥付にあり。

1933（大同2）年ころから満洲国政府の刊行事業として日程に上がっていた。同年3月の水野梅暁の渡満時にすでに各方面から出版の要望が出ており、3月30日の執政への謁見のときにその話題を伝えたところ、四肢五官を備えた満洲国の魂もここではじめて蘇ると溥儀もその期待を表明したという。この旨は武藤司令官にも報告され帰朝して文化事業部にも報告された。7月の水野梅暁渡満時には四庫全書の出版ともども外務省文化事業部折衝項目のひとつにあげられており満洲国政府側と折衝した。そして日満文化協会が発足した10月17日から19日までの総会においても検討され、わけても清朝実録に対しては鄭孝胥総

15) 謝貴安『清実録研究』（上海古籍出版社、2013年7月）、344頁。

理（満日文化協会会長）から、その出版を熱望され満洲国の経費で出版を行うので日本側の援助を、と要請された。以降、協会は、実録出版のための編集体制を整え、1934（昭和9）年9月14日の第3回協会評議員会で、日本側の出版委員を、池内宏・羽田享・水野梅暁各理事に委嘱することとし、満洲国側の羅振玉・榮厚・丁士源理事とともに出版体制を確保した。（中略）追加出版となる徳宗実録、宣統政記70巻は、溥儀蔵本を天津から取り寄せて出版に備えた。その費用3万2000円は羅振玉・鄭孝胥・榮厚・熙治・袁金鎧の寄付によるものであった。（後略）¹⁶⁾

この解題は全体として要領がよいが、この影印出版事業を推進した内藤と羅氏という二人のキーパーソンの役割をやや過小評価した嫌いがある。その理由は次のような三つの方面から立証できるのである。

(1) 実録への重視姿勢と出版期待が満洲国建立前の両氏にすでにあった。

まず、内藤が1900年3月『日本人』に発表された「支那調査の一方面——政治学術の調査——」において、支那における学術調査の重点は「清朝以来の掌故、実録の類」、「金石の類」、「塞外漢唐金元の諸碑」、「銅器金文」など「材料の蒐集」に置くべしと主張している¹⁷⁾。

そして、「満洲実録は故内藤湖南博士の発見に係はる。明治三十八年（1905）、奉天故宮の崇謨閣、文字通り汗牛充棟の堆書中に博士が発見せられた」そうである¹⁸⁾。また、1912年奉天宮殿調査で満洲実録の撮影許可を求める際に、次のように現地の役人を説得しようとしていた。

国史実録久已刊板、近日各国皆発庫蔵旧物以資研究、不敢秘惜。学術日進、各国共之、不分畛域、大勢為然。且国史実録在貴国旧未視為秘本。王祭酒先謙編東華録、刺取実録。李巡撫恒編耆獻類徵、彙写国史。敝国旧伝貴国太祖太宗世祖三朝実録乃康熙間鈔本。弟此次擬照満洲実録、意在校讐。¹⁹⁾

すなわち実録はこれまで王先謙編『東華録』に使われていたし、日本に伝わっている「三朝

16) 岡村前掲書、同注1、

17) 『内藤湖南全集』第二巻所収、162-165頁。

18) 今西春秋譯稿『満和対照満洲實録』『満洲実録解説——序をかねて』、東洋史研究会叢刊第一、1936年10月。

19) 『覆孫幼毅 明治四十五年五月』、『内藤湖南全集』第十四巻、273頁。句読点は筆者による。以下同様。

実録」は康熙年刊の抄本であった。学術資料は各国共有すべき財産であり、密蔵や独占は時代遅れの陋習だということである。

一方、羅振玉の孫、羅繼祖が次のように祖父の実録出版の希望を伝えている。

祖父早在避地日本京都时就蓄意印《清实录》，《后丁戊稿》中有《与柯凤荪学士（劭恣）书》（《贞松老人遗稿甲集》）説（中略）。这封信寄出后，不得柯的答复。因为这件事很使柯为难。时赵尔巽长清史馆，柯也参加馆事，新史既未修成，当然不能让《实录》先流传出去。²⁰⁾

すなわち祖父が辛亥革命後の京都避難中にすでに北京「清史館」の編修者を務めていた友人柯劭恣に「清実録」の印刷出版を勧めている。結局返事をもらえなかったが、その理由は趙爾巽を編纂責任者とする「清史館」は清史稿を編集している最中にあつたため、実録の外部流出は不都合ということにあつた。

(2) 満洲建国後にいち早く実録出版を提案したのは羅振玉で、内藤はその提案および影印費調達提案に応じて、政界中枢部に働きかけた。

羅繼祖は祖父の提案に対する内藤の賛同と支持について次のように記している。

伪满时《清实录》的刊行发端于我祖父（罗振玉）癸酉年冬（一九三三年）任满日文化协会常任理事时，当时曾得到日方理事内藤湖南（虎次郎）的赞助议行。不过以卷帙浩繁，印资太巨，再三磋议，才溃于成。

伪满成立，祖父藉满日文化协会的关系，提议印《实录》。附议并且极为得力的是日方理事内藤湖南。湖南早年充随军记者时，曾专程去沈阳看过《崇谟阁老档》，所以对此事极为关切，他和祖父的出发点不同，但很容易达成一致。²¹⁾

要するに、同じく協会の常任理事（岡村が羅は満洲側の常任理事、内藤は日本側の常任理事と確認²²⁾）を担当している内藤は羅振玉の「清実録」出版提案のもっとも有力な支持者であり、

20) 羅繼祖「伪满影印《清实录》缘起及其挖改」、《古籍整理出版情况简报》第158期、1986年6月1日。

21) 同注20。

22) 岡村前掲書、95-96頁。

それはその従軍記者時代の奉天調査の経験とも関係しているからという²³⁾。

しかし、羅継祖は「大清歴朝実録」と名付けられた「清実録」の影印出版経費について祖父羅振玉など「偽満大官」の寄附によると、上記の謝貴安氏と同じように事実誤認している²⁴⁾。これに対して、岡村氏は1933年10月19日に開かれた日満文化協会創立総会の3日目に「服部（宇之吉）からその経費の一半を日本側から支出するように努力すると発言がなされたが、鄭孝胥総理から、その経費は二八万円ほどなので、日本側の好意には感謝するものの今回は満洲国の支出とするとの発言があり、満洲国側の負担となった」と明らかにしている²⁵⁾。

にもかかわらず、これはあくまで公式の記録によるものであり、その背後の動きから見れば、張作霖・張学良父子の「逆産」を「清実録」の影印費用に充てるという羅振玉の提案（以下、「逆産利用提案」と略す）は早くも1932年の秋に内藤を通じて日本政府の中枢部に達し、大筋了解された。そして、鄭孝胥総理の國務院による経費支出は、協会創立総会の開催前にすでに決まっているようで、内藤はもちろん事前に知っていたが、東京の服部は蚊帳の外に置かれていたかもしれない。その意味で、大阪毎日新聞京都支局長、『新支那論』の口述記録担当で晩年の内藤との文通も少なくなかった岩井武俊が内藤逝去の8ヶ月後に『西園寺公と湖南先生』を出版した安藤徳器に打ち明けていたこと、すなわち「湖南先生が術策者として政界の裏面で活躍された三大事件」の最後の一つは、「満洲建国のかくれたる功労者として日満文化協会に、服部宇之吉博士の東大閥に対抗して老躯自ら渡満して京大派のために氣を吐いたことである」というのは、決して架空の評価ではなかったと言えよう²⁶⁾。

事実、岡村氏も、日満文化協会創設会の初日である1933年10月17日に、鄭孝胥と服部宇之吉が満日両側を代表して挨拶された後、「さらに羅振玉が委員長の座に着き、これまでの会議にいたる経過を報告し、また『大清歴朝実録』と題して出版することになった清朝実録に関して西

23) 陶徳民「内藤湖南の奉天調査における学術と政治——内藤文庫に残る1905年筆談記録を手掛かりに——」（『関西大学アジア文化研究センター紀要』第一号）を参照。

24) 「据我所知：当日伪满当局（实际是关东司令部），他们生怕溥仪和清朝发生联系后把伪满建立变成清朝复辟。但伪满文化协会既已提出要印《清实录》，协会是文化事业机关，又未便公然阻止，于是设下几道难关来支吾。首先是经费困难。祖父既已首倡捐款，其他伪满大官，此刻无论是谁都已填满官囊，不好不做点面子来响应一下，第一道难关算闯过了。第二道就是印到“同治”为止，《光绪实录》和《宣统政纪》不列入计划，有意识地割断尾巴。这在情理上本说不通，后来也被否决了，闯过了第二道难关。第三道难关便是《清实录》在甲午战争一段里，把“日军”写成“倭寇”，这是日本人非常忌讳的，并且认为妨碍“日满亲善”，非改掉不能付印。这个问题好办，遂由祖父将文溯阁的《实录》原本调来，亲自检阅，将其中“倭寇”字样全加挖改后付印，当时我就是执笔填写的人。」同注20。

25) 岡村前掲書、81頁。

26) 安藤徳器『西園寺公と湖南先生』（言海書房、1936年4月）、208頁。

園寺公望をはじめ斎藤首相・内田外相・荒木陸相らの協力に感謝の意を表するために謝電を打つことを決定、その後に議事にはいった」と記述している²⁷⁾。しかし、なぜ西園寺・斎藤・内田・荒木など政府中枢の要人たちに謝電打電することが必要であったかについては、ここで説明されていない。おそらく総会開催当時の羅振玉もその委細を公表していなかっただろうと思われる。しかし、以下で辿る一連の文通の関係部分から見れば、これら要人たちの「協力」とは、まさに羅振玉の「逆産利用提案」に対する大方了解のことであったと考えられる。

① 1932年8月22日内藤あて羅振玉書簡（抄）²⁸⁾〔写真3〕

満洲舊邦新造、一切尚無端緒、文化尤未遑措手。弟平生以有清一代實録関係事大、現張氏父子産業没収者、多至数千萬、半為民脂民膏、他半則盜賣 皇室私産。弟意印行實録需款甚鉅、若取之于此、不過千百之一、此事非与 貴軍部商榷、得其同意不可。

（巻帙太多、但有縮小用寫真石印）。

秋春不知杖履能來一游否。新國文化求贊助于鼎力者尚多也。

これによってみれば、1933年を待たず、満洲建国5ヶ月後の1932年8月22日に羅振玉はすでに「逆産利用提案」を内藤に打ち明け、しかも本土の「軍部」による「同意」を取り付ける必要性を訴えている。さらに、内藤の満州訪問を要請している。これに応じて、内藤が懇意のあ

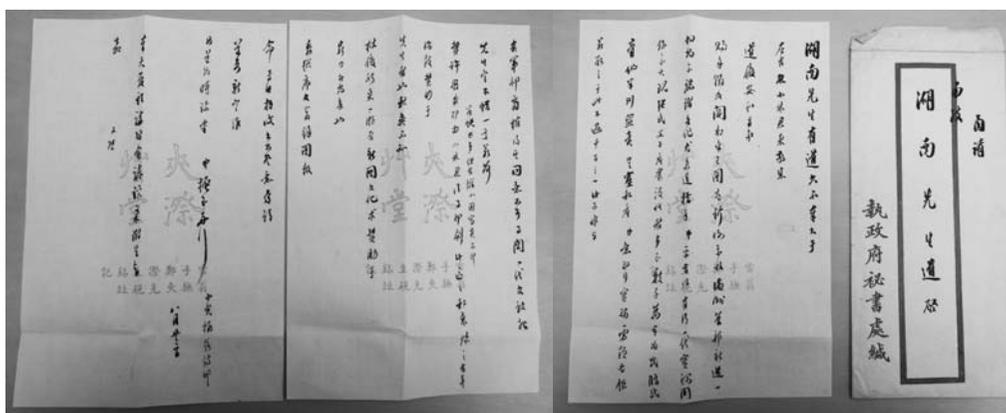


写真3 内藤あて羅振玉書簡

27) 岡村前掲書、80頁。

28) 関西大学内藤文庫所蔵。

る元老西園寺公望、そして齋藤実首相にも支持を求めている。

『遼寧省地方志』によれば、1932年6月20日「偽国务院公布《逆産処理法》、強行没収所有官戸及张学良等人的資産」とある。だとすれば、羅氏の「逆産利用提案」は、満洲国国务院の《逆産処理法》の公布日から2ヶ月後におこなわれたことになる²⁹⁾。

② 1932年12月12日内藤あて西園寺書簡³⁰⁾

彌御多祥御起居恭賀候。却説羅氏希望云々御下命の處、貴答延引御海容被下度候。實は賤恙不妙、其筋の人々へ面會の機なく、今日にいたり候。二三日前人を以て外相陸相へ依頼いたし候、陸相は快諾のよし、外相は同意なれども取調べの上返答との事に有之候。右申入候勿論成否はわかり不申候間、羅氏へは御確答無之様に願上候。病臂意曲折なる事不能。

草々頓首

昭和七年十二月十二日

公望

すなわち内藤の依頼を受けた西園寺は体調不良のため、すぐ取りかかることができなかったが、つい最近に伝えることができ、荒木貞夫陸相は快諾、内田康哉外相は一応同意であるが、取り調べる必要という打診の結果が分かった。しかし、まだ確約となっていない段階で、羅氏への返事を控えてくれるように頼む、ということである。

③ 1933年7月22日羅振玉あて内藤書簡³¹⁾

叔言先生大人 頃女婿鴛淵一（廣島文理科大學助教授・京都大學文學部講師）因觀光新邦、欲奉教帳下、并請覽庫書樓之收儲、幸蒙見允、猶身受焉。去年承教用張氏逆産刊印實録一事、弟以未識荒木司馬、先以此謀西園寺公。公因使人言于司馬、便得慨諾。又言于内田外務、外務對以所見固合、當考查再答。弟又見齋藤首相、具言尊意。首相亦許以説荒木司馬、武藤欽差。弟意此事不難為、在公與蘇戡總理之一斷耳。切望及時邁往成茲盛事。弟近狀、當由鴛淵委陳。方酷暑、伏惟為道珍愛。癸酉七月廿二日

29) http://www.lnsdfz.gov.cn/lndsj/lnggkfssndsj/201111/t20111128_758355.html という遼寧省地方志サイトに2014年1月20日にアクセス。なお、孔経緯・王連忠・孫建華「九一八事変後日本対奉系軍閥官僚資本的侵掠」(China Academic Journal Electronic Publishing House)によれば、1933年までの逆産整理収入は417.7万元、その中に張氏の「辺業銀行」所蔵金塊の賣却による収入359.5万元が含まれているそうである。

30) 安藤前掲書、198頁。句読点は筆者による。

31) 「與羅叔言 昭和八年七月」、『内藤湖南全集』第十四卷、267-268頁。

西園寺の返事を受けた半年以上の1933年7月22日、内藤は娘婿の鴛淵一の渡満をきっかけに羅氏にあてたこの手紙で、鴛淵の資料調査に対する便宜提供を依頼するとともに、「逆産利用提案」に関する西園寺返事の内容を打ち明け、しかも斎藤首相に直接進言し、斎藤は荒木陸相（ここでその役職を中国風の言葉「司馬」で表現）と武藤信義満洲派遣特命全権大使（関東長官・関東司令官を兼任。その大使の役職は、ここで中国風の言葉「欽差」で表現）に話すと約束しているなどを伝えた。なお、このことは難しくない、君と鄭孝胥（号は蘇戡）総理の決断次第、機を逸さずに実行し全うすべき「盛事」とも補足した。ここから、内藤は、羅氏と鄭氏のライバル関係に気づいていなかったようだということが窺い知ることができる。

④ 1933年10月羅振玉あて内藤書簡³²⁾

叔言先生大人、去月鴛淵助教歸、具言起居住勝狀。又捧讀賜書、悉印行實錄事已有頭緒、欣快之至。弟已修書西園寺公・齋藤首相、謝其鼎力矣。貴國文化施設事體重大、亦弟卅餘年精力所注。此次見招、獲參末議、敢不盡吐所懷抱、以供採擇耶。擬於十一日開帆神戸、十四早晨船到達大連、直赴旅順、閱公所藏檔案、以十五日入瀋。外務原議、欲俟貴邦建立文化研究院、協力翼成。弟輩今次之行、想當先設日滿文化協會以贊實行。弟意欲先兩國學者會議與公妥商草定議案、以免臨事差池。入瀋之日、得請少閒、蒙允略陳鄙衷。幸共睽違十餘歲得握手、中興之辰、僂指航程、不堪神往。蘇戡・沈盒諸公、願為致意。弟虎

これによってみると、内藤はすでに9月満洲から帰朝した鴛淵の持参した羅氏の親書で「印行實録」の費用が「已有頭緒」、すなわち水野梅曉の働きかけや鄭総理の好意で国務院出資によるであろうということを了解したようである³³⁾。なお、内藤は己の渡満日程を知らせたうえで、日滿文化協会開会前に羅氏と打合せることで会議の議案を確定し、「以免臨事差池」すなわち事柄の臨時変化を防ぎたいという気持ちも内々に伝えた。

⑤ 1933年12月4日斎藤実あて内藤書簡（抄）³⁴⁾〔写真4〕

鄙人事、十月中御報申上之如く、同月十一日神戸開帆、満洲国へ出張、新京に於て日滿文化協会組織之件、粗ぼ完成、例之清朝實録出版費ハ満洲国より支出之旨、鄭総理より申出

32) 「與羅叔言 昭和八年十月」、『内藤湖南全集』第十四卷、268頁。

33) 鄭孝胥と水野梅曉の交友について、陶徳民「鄭孝胥與水野梅曉的交往及其思想初探——以霞山文庫所藏《使日雜詩》卷軸為線索」（関西大学『中国文学会紀要』第26号、2005年3月）参照。

34) 国立国会図書館憲政資料室所蔵『斎藤実関係文書目録』書翰の部2、1114-2。

有之候。

すなわち10月11日神戸出帆の前にも、内藤は斎藤首相に1通の書簡をあてたことがあり、それも国立国会図書館憲政資料室で所蔵されている。この書簡はいわゆる帰朝報告であり、文化協会創設の件も実録出版費用の件も着落を見たと告げている。その上、文部省国書保存会会議出席のために13日上京予定があるため、「満洲国瞥見」の感想を伝えたいという面会希望を書いている。なお、同書簡に満洲訪問時の即興漢詩七律一首が同封している〔写真5〕。それは、3日後に京都帝国大学中国文学教授の鈴木虎雄に送った書簡に同封の漢詩とは同一のものであり、そこには「癸酉秋入滿有作」という由来を記す文言があった³⁵⁾。

考えてみれば、羅振玉はなぜ現地の関東軍や鄭孝胥総理の國務院と相談せずに、「頭越し」的に「逆産利用提案」を内藤に頼み、本土の「軍部」首脳の同意を取り付けるように働きかけようとしたのであろうか。岡村氏は「羅振玉も満日文化協会の活動については彼自身の意図や想い入れがあり、具体的な諸事業について満洲国とは距離を保ちつつ自主的・主体的に運営した

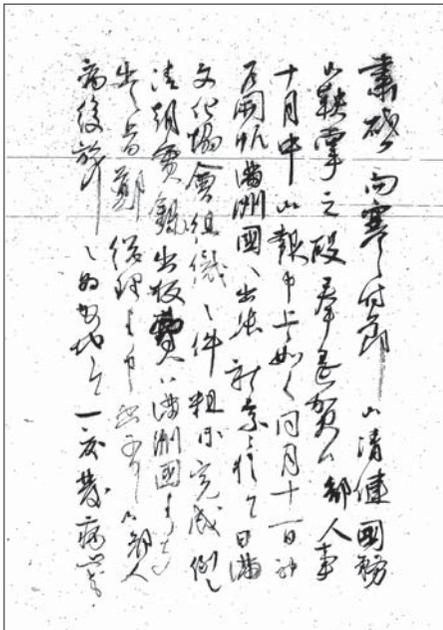


写真4 斎藤あて内藤書簡

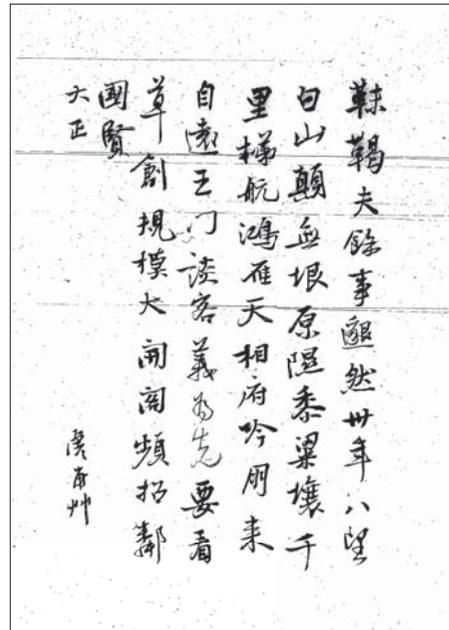


写真5 斎藤あて内藤書簡の同封漢詩

35) 和文書簡733、『内藤湖南全集』第十四卷、650頁。

いと考えていたのであろう。時として理不尽にみえる彼の要求も、それは協会を十全に使って満洲の諸々の文化事業を主導していこうというあらわれであった」と鋭く指摘している³⁶⁾。「満洲国とは距離を保ちつつ自主的・主体的に運営したい」ということはとりもなおさず、鄭総理と距離を置くことであった。要するに、両者のライバル関係は、満洲建国前にすでに芽生え、建国過程で決定的になり、その後はさらに激しくなった³⁷⁾。したがって、のちの羅氏が奉天博物館名誉館長に就任予定の件も、羅氏の任命した館員が逆産処理委員会の幹事、財務部兼文教部事務官および奉天博物館主任者などを務めていた中原済と衝突を起こしたため、取り下げることになった。しかも逝去12日前の内藤の名義を借りた形を取ったのであった³⁸⁾。

概していえば、満洲国では鄭総理に対して羅氏が劣勢に立たされていたと並行的に、日本では文部省対満文化事業の関係上、東京の服部宇之吉に対して内藤もやや不利の地位にあった。そのため、両者ともに旧誼を生かし相互結託する必要があり、「逆産利用提案」をめぐって「頭越し」的な働きかけ方を取って取ったのであろう。

(三) 結語

本研究ノートで、「満鮮古戦場」探しをめぐる内藤に対する石原の協力と「清実録」影印費調達をめぐる羅振玉提案に対する内藤の協力という二つの案件を、関連書簡の精査で検討してみた。いずれも実現されなかった企図であったが、歴史研究者としての筆者にとっては興味津津の考察対象であった。なぜならば、歴史研究の奥義は、特定の時代と条件のもとで、ある案件の解決に関する可能な選択肢がどれぐらいあったか、なぜ結果的にその中の一つの選択肢が選ばれたか、またその選択の結果がその後の事態の変転にどのような影響を及ぼしたのか、などを明かにすることにあるからである。いわゆる「歴史の教訓を汲む」ということは、事実関係

36) 岡村前掲書、112頁。

37) 羅繼祖は、建国過程の両者関係を次のように述べている。「溥仪要复辟的思想倒是和祖父一致的。所以当郑去沈阳参加板垣召开的会议时，溥仪写了“必正统系”的十二条，命郑带交板垣，并且让祖父同去与会。结果，十二条郑故意不交出，祖父虽同去而会却未得与。但这十二条大大赢得了祖父的高度颂扬，说“皇上”真能坚持原则。」「溥仪对此也非常恼火，但板垣提出的最后一手经郑孝胥传达后，谁也不敢再说别的。溥仪受到板垣和郑氏父子的双重威胁失去主意，这时祖父在旁不得不说话。溥仪总算记性好，在《我的前半生》里写道：“罗振玉垂头丧气地说：‘事已如此，悔之不及，只有暂定以一年为期，如逾期仍不实行帝制，到时即行退位，看以此作为条件，板垣还怎么说。’」。すなわち板垣征四郎と鄭孝胥との会談で本来、羅振玉も参加予定であったが、「局外人」のように蚊帳の外に置かれ、その主張のとおり溥儀を最初から皇帝にすることができなくなったという。同『我的祖父罗振玉』（百花文艺出版社、2007年）、178-179頁。

38) 岡村前掲書、112頁。

の究明から始めるしかない。ある中国の近代史研究者が、事実関係を究明し物語をありのままに語れば、その中から引き出すべき教訓や結論をとくに言わなくても、賢い読者や聴衆が自然に悟るはずであると述べたことがある。首肯できる見解だろうと思う。

謝辞：本稿に関する資料収集は、銭婉約、西村成雄、内田慶市、鵜飼香織、新谷大二郎、二ノ宮聡諸氏および関連所蔵機関のお世話になった。原資料における一部の崩字の解読は藪田貫氏の教示を受けた。なお、本論文は平成19-20年度関西大学学術研究助成基金（研究課題：内藤湖南の中国学形成と人的ネットワーク — 関西大学図書館所蔵の未公開書簡を中心として）による研究成果の一部を含んでいる。記して御礼を申し上げたい。